

日本画家からの書簡―房総の素封家と若き日本画家たち

山口蓬春を中心に「展補遺」

吉田恵理・堀内瑞子

城西国際大学水田美術館では、「房総の素封家と若き日本画家たち 山口蓬春を中心に」展（二〇〇七年十一月二日～十二月一日）を開催し、昭和初期から戦後にかけて、房総のある旧家の主人が地元縁ある画家たちを支援する中で育まれたコレクションを紹介した。この展覧会では山口蓬春のほか、千葉県土気出身の石井林響、林響を慕って県内の大網に移住した田岡春径、林響の内弟子の秋野不矩、夫の沢宏毅、千葉県出身で蓬春に師事した秋葉長生、鍍金家で千葉県に縁の深い香取正彦など、総勢一四名による四三點の作品と書簡資料を展示した。これらは大半が掛軸や色紙、画帖など小品であるが、個人が愛玩するに相応しい珠玉のコレクションといえるだろう。

特筆すべきは、画家たちから収集者に宛てた書簡が作品と共に残されていることである。これらの書簡は、画家たちと、彼らを支援した収集者との交流の証であると同時に、画家同士の交遊なども明らかとなる貴重な資料である。また、後に大成する画家たちの若かりし頃の生活ぶりや、作品制作に対する心情などが素直に語られている点でも注目される。

本稿では残された書簡のうち、このコレクションの主要画家である山口蓬春と収集者と同郷の妻・春子、田岡春径、秋野不矩から収集者に送られた主要な書簡七十二件の全文を翻刻し紹介する。なお、本展展覧会図録には「解説」「作家略歴」「書簡翻刻」のほか、カラー図版で出品作品のうち二二点を掲載した。あわせてご参照いただければ幸いです。

〔凡例〕

- 一、千葉県史料研究財団編『千葉県近現代史部会調査報告書 文学美術関係資料目録』（二〇〇三年）には、この旧家に残された書簡資料六一三件が目録化されている。その内、本展で取り上げた画家などからの書簡は二二二件で、この一部は、本展覧会図録および『生誕二〇〇年 田岡春径展 房総に生きた南画家』（二〇〇七年、城西国際大学水田美術館）に翻刻、掲載しており、本稿ではこれら二冊の図録に未掲載のものを収録した。
- 二、書簡の配列は、発信人ごとに発信年月日の順とした。発信年が不明な場合は、内容から推測できる年を（ ）に入れ該当場所に、推測できないものは、同発信人の末尾に置いた。
- 三、各書簡文の冒頭に、次のような見出しを付した。
発信人ごとの通番号 発信年月日 発信人氏名 葉書／封書 『千葉県近現代史部会調査報告書 文学・美術関係資料目録』の目録番号
- 四、翻刻にあたっては、読解の便のため以下のとおりにした。

（一）旧字体を新字体に改め、仮名遣いは原文に従い、適宜濁点を補った。

（二）読点は、原文によらず適宜施し、改行は適宜調整した。

（三）判読不明な箇所には□をあて、誤字、当て字には（ママ）と注記した。

*本稿執筆にあたり、翻刻掲載をご許可下さったご所蔵者および著作権継承者の方々、ならびに、難読文字等についてご教示いただいた加藤時男氏（千葉県文書館研究員）に心より御礼申し上げます。

〔翻刻〕

●山口蓬春・山口春子

1 昭和四年五月三十日 山口春子 封書

H 2

日に増しお暑つくなつて参りました、御起居如何あそばされますや御伺ひ申上げます

先日は御丁寧なお手紙を頂戴いたしまして恐れ入りました、つい手前にかまけてをりまして御返事もさし上げず、まことに失礼申上りました

さて御依頼の半切画ぼつ／＼出来て参りましてもう十二三枚集まりました、若い人たちです故熱心に描いて参りましたので、みんな良い出来のやうで御座います、それでお金も早く渡してやりたいと存じます故、恐れ入りますがおついでにお送り願ひたう存じます、半切だけで御座いますが十五枚以上出来ますやうで御座います、いづれ御拝顔の節、万々申上ります

五月三十日

山口はる子

早々

2 昭和五年三月八日 山口蓬春 封書

H 46

拝呈、日々の雨、鬱陶しき限りで御座います

去月二十七日平福、松岡両先生を神戸まで見送り、帰途、大和、月ヶ瀬に写生に立寄り昨夜帰京仕りました

林響先生の御死去まことに残念な事で御座いました、御くやみ申上げます、小生も留子中姉が死にまして葬式其他にて雑然たる中へ帰京しましたので寸暇を得ず閉口仕りました

留子中御丁重なる御挨拶をいたゞき恐縮の至りで御座います、表装は私も出

発直前に見ましたが中々良く出来て感心した次第です……、但し中味の画がオソマツにて汗顔く、いよく来月は大和画会もあり何かと心せわしくなります

御ひまが御出来の節、御上京御来遊の程待上げます

早々敬具

三月八日

山口蓬春

今月の「アトリエ」と云ふ美術雑誌に小生論が出ています

3 昭和五年四月一日 山口春子 封書

A 10

拝啓、過日は切角の御光来にいそがし／＼にまことに失礼申上げました、その節は存じよらず結かうな御品を給わりかへつて相済まなく存じてをりますさて先日おはなしの書生さんのことで御座いますが早速にも来ておもらひしたいと存じましたのですが、実は一兩日のうちに女中が参るのですがこれも只今の家では女中部屋といふものもなくまことにせまくて閉口してをります故、甚だ勝手なことを申上げて恐れ入りますが只今の書生が今月の二十日頃には帰りますので今月の末におつれ頂きましたらこちらは都合で御座います、先日おはなしの私共へお心づかい下さる点はあの節申上げました通りで御座います故、けて御心配なく願ひたいと存じます、一石渡様の御照会(ごまご)で御座いますので本人に対する点もこちらはまことに安心致してをります

何卒宜敷お願ひ申上げます、未乍ら御輿榭へよろしく御伝へ下さいませ

早々

四月一日

山口はる子

4 昭和五年五月三日 山口春子 封書

H 34

拝復、御丁寧なる御芳書給わり恐縮仕り候、御上京の節は何のおもてなしも申上げずまことに失礼の数々おゆるしの程願上候、その節は新茶沢山に頂戴仕り有り難く御礼申上候

さて秋葉ことに種々お心づかひまことに恐れ入り候、温順にてよく働き又勉強致し居り候へば何卒お気づかひなく御休心の程願上候、秋葉の宅よりもお手紙頂戴仕り候へばおついでに節宜敷御伝へ下され度候

右御返事まで申上候

敬具

五月三日

山口春子

5 昭和六年十一月九日 山口春子 封書

H 38

晩秋の候、益々御機嫌うるわしく入らせられます御こと大慶に存じ上げますさてこのほどは御多用中にもかゝらずお心にかけてさせられ萩を沢山に御送与下さいましてまことに有りがたく存じました、厚く御礼申上げます、主人も大よろこびにて早速植木やに命じ植つけ申ました、おかげ様にて来春の芽出しや秋の花などさだめしみごとなこと、只今より楽しみにいたしてをります、先頃御上京の節はわざわざお立寄り下さいましてまことに恐れ入りました、いつも乍ら何のおもてなしも申上げず、失礼いたしました、その後帝展御見物に御上京のこと、お待ち申上げてをりましたらお手紙を拝見してほんとに驚き入りました、不況の折柄農村はかく別と伺ひつねに御同情申上げてをります、先何ともく、お気の毒なこと、存じあげます、万事にたゝる、石渡様など種々お骨折の御こと、お察し申上げてをります、東京は二十一日は少しつよい雨がありましたのみで御座いました故つい存じません為お見舞も申

上げずまことに失礼申上げました

お寒さの折柄お体を御大切に御自愛のほど祈り上げます

右取りあへず御礼かたぐ御見舞まで

十一月九日

山口春子

6 昭和七年六月十三日 山口蓬春 封書

I 66

拝啓、日々鬱陶しき事に御座候、先日は御来駕被下何の風情もなくまことに失礼申上候、只今御手紙並に墨譜御送り被下恐縮仕り候、斎藤の方へ本御とゞけ被下候由、御手数相願ひ恐れ入り申候、有難く御礼申上候、次に墨の拓本拝見実結構のものと拝見仕候、どうか小生来月十五六日頃錦地へ参上致候間、それまで他所へやらずしつかり御監督の程何分願上候、もつとも御書面中にある通り一々墨色を拝見する事中大変と存候、若し相願はれますならば一日拝借心のまゝに発墨を見たいものと存候、御出京の御ついでに一日見せていたゞければ直更虫の良い事と存じます、次に墨の価格について一応御知らせが願はれませんか、若し御ゆづりが願はれ、ば都合により全部或は一部分の当方予算も御座います故一つ御面倒様でも其辺御配慮をわすらはし度く存じます、それ等をきめていたゞかないと落付いて朝鮮旅行が出来るそうもないと思はれます、まことに手前勝手のみ御願ひ申上げて申わけとても御座いせんが何分宜しく願上げます、取急ぎ要のみ申上げます、乍末筆御令閨様並に林響先生亡夫人にもよろしく御鳳声の程願上げます

六月十三日 山口蓬春

二陣 重ねてくだい様で御座いますが小生二十日夕より出発、旅行に出ます故、恐れ入りますがそれ迄に御一報願はれませんか

7 昭和七年六月十九日 山口蓬春 封書 H 47

拝啓、先日は早速御返事頂戴御手数相かけまことに恐れ入り候、小生も安心仕り候、明夜出発して来月十日頃には帰京仕り候、其後に一度参上宝物種々拝見致度しと存候、何分参上まではゲンデウ御監督の程願上候、御繁多の折柄度々御迷惑願ひ恐縮仕候、万謝仕候、取あへず御あいさつ申上候

六月十九日 早々 蓬春

二伸 白閑亭の方向に火事であつた節には御かけつけ願度候

8 昭和七年八月十九日 山口蓬春 封書 H 44

拝啓、涼気を感じ申候、昨今御気嫌よろしく大慶に存じ奉り候、硯墨の件について度々御高配を忝ふし恐縮の至りに御座候、小生都合はいつにてもよろしく候へ共、若し御来駕相願はれ候はゞ二十四、五両日の中いづれの日にか願ひ度しと存じ候、折返しどちらの日か御きめ願はるれば墨商を同時刻に小宅まで呼びよせ置く可く候、立合ひの上にて評価をもらひ度いものと存候、同人はたしか杖田氏の友人なれば白閑亭主人の御所蔵品についても知る所多き者と存候へば一番たしかと存候

取急御返事申上候、末筆ながら御奥様へよろしく御鳳声の程、願上候
早々敬具 山口蓬春
八月十九日

9 昭和七年八月二十六日 山口蓬春 封書 H 43

拝啓、引つゞき日々の御暑閉口の事に御座候、さて先日は家族達にて終日御

閑居を驚かし候事まことにく御迷惑様相かけ候次第、幾重にも御海容の程願上奉り候、御手厚き御馳走様に相なり有難く万謝仕候、数々御名品拝見加へて硯墨の楽しみ致候、近来の愉快此事と存じ帰京早速御礼の詞申上度候処、御承知の如く本日より夏期大学の講修初まり汗と戦申居り、とんと御無礼申上候

末筆ながら御奥様御令妹様にもよろしく御鳳声の程願上奉り候
早々敬具 山口蓬春

八月一日

二伸 秋葉帰京の節御丁寧なる御芳書頂戴かへつて恐縮仕候、御ついでの折も候はゞ、石井様の方へもよろしく御鳳声の程願上候

10 昭和七年九月一日 山口蓬春 封書 H 29

拝復、度々御手紙にて御手数相かけまことにく恐れ入り候、拓先生の御蔭にて名品入手の事と相なり愉快の事と存候、万事之れ御厚意の賜と厚く御礼申上候、早速今秋の作品に用ひ度き考に御座候、白閑亭の方へは小生よりあいさつ状差上げてよろしきや否やと存じそのまゝに致し居り候へ共如何に候や、御代金は近日御手元まで先日如く半金取あへず御送附仕る可候、御取つぎ被下度願上候、次に蟹甲青も洪武十三年も皆写生ずみの事なれば小生より形を描き御送り申す可きものなく遺憾に存候、どうも墨拓の御専門だけありて硯墨に関しては小生力ブトをぬぎ候、いよく今日より下絵に取りかゝり候、一度院展、青滝展御見物に御東上なされては如何、例の画冊御忘れなき様願上候

取あへず御礼申上候、御奥様御老母様へよろしく御鳳声の程願上奉り候

九月一日

早々
沙門羊寛拜

11 昭和八年五月二日 山口蓬春 封書 図① H 30

拝復、先日は御光来に接し何の風情も無之まことに失礼申上候、さて一昨日墨商本多一平君月末の勘定取りに來り、其節御あづかりの墨の評価を願ひ候處、同君腹臆なく左の如く申してまへり候、御返事までに申上候(すべて客に売る売価に候由)

○竜門墨 四〇円

○方于魯(靈犀) 一五円

○猿馬乗図 三五円

○大國香 一〇円

○天保十三年 方形のもの 一五円

○双竜(双鳳か?) 五〇円

○玄竜かん 四、五十円

○乾隆墨 三〇円

○色墨箱入 四〇円

以上の由にて若し商人引取る場合は右の二割引にて引取る由に候、つまりざつと二百八、九十円になるわけの由なれ共、小生が人に世話する場合には中間を取り一割引ぐらいにしてやつていたゞき度し、御報告申上候、兎に角目下は手元にあり大切に御あづかり申置候、馬の泥像の方向分よろしく願上候
取急ぎ御返事申上候

五月二日

早々
山口蓬春

12 昭和八年五月二十五日 山口蓬春 封書 I 68

拝呈、昨日は御光来被下何の風情とても無く失礼申上候、名幅頂戴恐縮に堪へず候、今後は短気を起し候節あれをながめて訓と致し度く存候、まことに良い宝物と存候、老兄忍耐の徳甚大恐縮々々、御寛容の程願上候、どうも此戦争はつきり小生の敗北降参仕り候、拙宅の一同へ種々御心尽しの御品沢山頂戴有難く厚く御礼申上候、御輿様へも何分御詫の程願上奉候、取急ぎ御礼方々御詫申上候
早々

五月二十五日

山口蓬春

13 昭和八年六月一日 山口蓬春 封書 I 74

拝呈、御丁重なる御書状にて益々恐縮仕り候、小生の方も重々相済み申さず万謝の外なしと存候、ついでには急に御目にかゝり度き件出来(石井氏の件にて)御迷惑様ながら御上京の折、拙宅まで御光来願はれ宜敷候や、貴意を同度と存候、成る可く他へ御立寄にならず拙宅へ直行の程願上候、乍末筆御輿様へもよろしく願上候
早々

六月一日

山口蓬春

二伸、賢台さきにおとゞけの石井氏の「墨」御上京の折御持参被下度、一寸拝見の要あり、是非願上度候

14 昭和九年一月十六日 山口蓬春 封書 A 6

拝呈、春に入り日々の御寒さ特の外に御座候、御一同様御変わりもなく大慶に存じ奉り候、過半はあいにく外出中御光来被下、家内一同に對し種々頂戴物まで仕り有難く厚く御礼申上候、家内の流感も少々悪化し今日に至り快復の

はこびに至らず閉口致し居り候、御見舞給はり厚く御礼申上候、秋葉君も引つゞき臥床、昨日同君令兄御来駕被下候次第に御座候、目下大流行の感冒、貴家に於かせられても御自愛專一に祈候
取急ぎ御礼方々御見舞申上候

一月十六日

早々

山口蓬春

15 昭和九年九月三日 山口春子 封書

H7

拝啓、過日は切角御光来被下候処、亦々折あしく主人不在にてまことに失礼申上候、その節は何よりの御品頂戴仕り有り難く御厚礼申し上候
扱その折御申越しの件おはづかしき次第に候へ共、主人二三認め候へば同封致し、とに角御目につかけ候、院展へ御上京の節は是非御立寄被下度御待ち申し上候

未筆乍ら御奥様へ宜しく御伝へたまわり度願上候

九月三日

敬具

山口蓬春内

(別紙) 千葉県本納町愛葉組合事務所

千葉県本納町愛葉組合事務所

千葉県／本納町 愛葉組合事務所

拙い文字にて御免被下度候 蓬春生

16 昭和十年五月十七日 山口春子 封書

I8

拝啓、皆々様御揃ひあそばされ御機嫌よろしく入らせられ候御由、大慶に存じ上候、手前の方はいつも御無沙汰にのみ打すぎ居候処おたづねたまわり恐縮に存じ居候、この程は何よりの新茶沢山に御恵送たまわり有り難く幾重

にも御礼申上候、老人なども非常によるこび日々風味致し居候、主人ことも先月末より旅行に出かけ、やうやく昨夜帰宅、今日は中展審査の為出かけ候、秋葉君など只今青くなつたり赤くなつたり何も手につかず心配の様子に御座候、入選させたきものと存じ居候
未ながら御奥様へお宜しく御伝言被下度願上候

五月十七日

敬具

山口春子

17 昭和十一年三月三日 山口蓬春 封書

I76

拝啓、や、春めき申候へ共、御寒特の外にて閉口致候、過日は御繁多の中を御尊来の御厚志何とも御礼の申上様も無く只々感謝仕り候、過日も申上候如く武君独立自営の意志をあく迄も尊重、了解致し居るつもり盲動は不賛成、只々此事に御座候、よろしく小生意中御諒恕の程願上候
御礼方々右申上候、乍末筆御奥様にもよろしく願上候

三月三日

敬具

山口蓬春

18 「昭和二十一年九」十二月十四日 山口春子 封書

I11

啓、向寒の砌に御座候、御貴家様御一同様には御起居如何に入らせられ候や、当地は近年稀なる降雪にて最早三尺余も積り実にく閉口致し居候、私共も十一月末までには葉山へ移転致す心組の処、目下右様の事情にて貨車出ず、しかし本年中には是非共参り度存じ居候、さて御申越しの記念画承知致し申候、右様にて本年中には葉山へ参り候間、来春にても御光来たまわり度、移転済みの上は御通知申上ぐ可候、目下荷造りその他にてかまけをり候ため御返事延引致し候、末筆乍ら御奥様へもお宜敷御伝言たまわり度願上候、右御

返事のみ申上候

十二月十四日

二伸、葉山の住所

神奈川県葉山町堀内一、二五〇 山崎別荘内

早々

山口春子

19 昭和二十二年五月二十四日

山口蓬春 封書

C 12

拝啓、新緑の候益々御清栄程賀奉り候、さて過日は折角御光来被下候にも
かゝはず何の風情も無く失礼申上候

御委託の画表装今日出来葉山まで表装師よりとゞけまへり候、受取り箱書仕
り候、いつにても御都合よろしき折葉山まで御出むき、留子番のものに尊台
御来駕の節御渡し申上ぐる様申置候間、御持帰り願上候、表装代は三千七百
円支払申候、御委託画ありし節より諸物価特の外の高騰をしめし此の結果に
相なり申候、表装師の申す処によれば

箱代千二百円也（塗りはとりやめに致候由、すぐにハゲル様の塗にて別に四
百円程かゝる由にて時期を待ちて改めて仕上る方上策との由）、軸代六百円、
裂地其代手間代にて千九百円也の由、以上の如くに御座候、然し乍ら時節柄
にて立派に出来本懐の至りに御座候
取り急ぎ御報方々右の如くに御座候、小生等留子一ヶ月程にて帰葉仕り候予
定、其後御拝芝万々御面語申上度候

五月二十四日

早々敬具

山口蓬春

20 昭和口年四月七日

山口春子 封書

H 24

御芳書有り難く御礼申上ます、過日は御遠路わざわざ御光来下され折あしく

主人こと不在にてまことに失礼申し上げまして御座います、その節は二つと
ない名鳥を頂戴仕り有り難く御厚礼申上げます、主人こともさだめしよろこ
びますこと、存じてをります、その後名鳥は非常に元気で御座います故御安
心あそばして頂きたく存じます、おついでに節石井様奥様へ宜しくお伝へ下
さいませ、未乍ら皆様へも宜しくお願ひ申し上げます
取りあへず右御礼まで

四月七日

早々

山口春子

21 昭和口年九月十九日

山口蓬春 封書

A 7

拝復、度々御芳書接し恐縮仕り候、家内も其後御蔭様にて快方に向ひ安神仕
り候、御見舞の程厚く御礼申上候、白閑亭の方種々御手数相かけ恐縮仕り候、
厚く御礼申上候、本日白閑亭の御長娘わざわざ御見舞被下有難く存候、御さ
わがせ申したる事申訳なくよろしく御礼願上候
取あへず御礼申上候

九月十九日

早々敬具

蓬春

22 昭和口年六月二十四日

山口蓬春 封書

I 20

拝啓、梅雨鬱陶しき候御変りも御座いませんか、御見舞申上げます
過般は御丁寧なる御祝詞頂戴有難く御礼申上げます、早速御礼申上げ度く存
じながら何かと雑用多く取りまぎれ失礼申上げ居りました、無頼幾重にも御
寛宥下さいまし、ついでに例の半切画御申きだけ全部出来上りました、御
ついでに節御上京御たちより下さいませんか、小生二十八日は不在ですが三
十日だと在宅都合がいゝと存じます

御拝眉万々御礼申し上げます

取急ぎ御礼方々御報迄

六月二十四日

早々敬具

山口蓬春

●田岡春径

1 昭和五年十月十日

田岡春径

封書

1 87

拝啓、先日は御不快之処を御邪魔且ついろいろ御馳走様に相成候、其後御気分如何に候哉、時候不順に候間十分お大事に被遊度候、あの翌日二番にて白閑亭奥さんと同道水上様へ訪問致し皆さんの希望を述べ配慮方依頼いたし候結果、小点斗りの陳列は不可能にて王者の瑞と野趣二題は出陳之事といたし、白映はやめにして其の代りに破邪顕正か獅子か妙哲かの三点の内より一点丈け選抜して出して貰ふ様、結城素明氏に依頼する事に相成辞去いたし候、実は白映の面積丈けへ妙哲一点は勿体ナイから他に小点三四点並べて頂ければ一番結構ですがとお話致候得共、夫れは到底駄目だと云ふので夫れ以上お願も出来ず前記の通りの事と相成り、兎に角破邪顕正か獅子でも出して貰へれば此際上等としなければと存じ候、右一寸御通知申上候
次に小生出品画に付ては色々御親切に御心配下さいまして有難ふ存じます、どうも一寸畑違ひの仕事であるのと東京で大急ギノ手入れてしたから到底よくゆく訳に参らず本年は先づ六ヶしいと存じます、唯御後援下さる貴下や又世間へ申訳が無いやうな気がいたします、然し又どんな事でまぐれ当りがないとも限りませんからネー、それでは御病後お大事に、呉々も御奥様へよろしくお伝下さい

十月十日

匆々不備

春径生

2 昭和五年十月十九日

田岡春径

封書

1 88

拝啓、この度は何やかやといろく御厄介になりました有難ふ御座いました、厚く御礼を申し上げます

嘸お疲れでがつかりなされた事でせう、それも香しい話で進行したのなら張合もありますだんくいな傾向ですからね、どうやら遺作展も影が薄くなつてきました^{ついで}が結極線香はなびになりさうな気がいたします、貴下もいろくお骨が折れるわけでお気の毒に存じますが、何卒此後共御同情御援助をお願いいたす外ありませんからどうかよろしくお願申上げます

帝展南画の方は平凡俗作之感がありました、別に恐ろしいものは見当りませんでしたね、来年は大に研究いたしませう

先是不取敢御礼まで、御令夫人様へよろしく御伝願上候

敬具

十月十九日

春径生

3 昭和六年三月二日

田岡春径

封書

1 90

昨日は日暮方にお伺いたしいろいろお雑さをおかけいたし誠にすみませんでした、其節は御厚意に反き却て失礼でしたが幾重にもおゆるし下さい、それに又お寒いのにわさくお送り下さいまして毎度御親切の御志たく感謝の外ありません、ドテラを着せて頂いたので少しも寒さを感じないでお庇様で風邪も引かず帰りました、誠にいろいろ御芳情頂きましてありがたうございました、厚く御礼申し上げます

遺作展も取越し苦労かも知れませんが何かと心配になります、どうか御迷惑でも万事御配慮お願申上げます

今日茂野様から白閑亭奥様へ手紙にて東京の記者達待遇にて七八円程度宛懸る

模様は驚いて面喰った様子です、人員は十五名位来るそうです、場内の幕は垣見泰山氏から借りる事になりそうです、出品申込書は白閑亭へ今朝着迄の分約三十点に候、青森の写真も中止したり幕も軽便に借りられるとすれば大分費用が節減される訳ですね、何れ近い内お目に掛つていろいろ御相談願ひたいと存じます

先は御礼迄、委細は拝姿万々

御令夫人様へ呉々もよろしく御伝へお願申上げます

三月二日

頓首
春径拝

4 昭和六年五月十一日 田岡春径 封書

189

此の度は貴下のお肝煎りにて誠に思ひがけぬ旅行をさして頂き有難ふございました、早速御礼申上げやうと存じて居りました処へ、今朝御手紙頂き恐入りました、家内もお庇様で丁度よい機会に結構な所を見せて頂き実に良かったと大へん喜んで居ります、殊に奥様にはいろいろ御厄介を煩しました事を厚く御礼申上げます、何しろ至つて足弱の質にて遠足の出来ぬ厄介な代物故、嘸御迷惑の事でしたらうと存じます

今度は御亭主のまだ見ない所を先にしてやられ聊かやけますよ、御同様お留守番などはあまり結構な役廻りでありませんからね、オツトこれは奥様達へは内密く、それに色々風景の模様や弥次気分などを聞かされ一層あこがれの念にかられます、次回は男達で樺太へものしませう、呵々々々

何卒御令夫人様へ呉々もよろしく御伝へ願います、愚妻からも御挨拶申上げる筈ですが何れお目に懸つて御礼申上げます、さようなら

五月十一日

春径生

5 昭和六年八月二十八日

田岡春径 葉書

D 17

先日は失礼いたしました、其節はおみやげ頂戴難有御礼申上げます

只今南画院のを描いて居りますが、切に間に合はないかもしれません、帝展出品は大に努力いたす積りで居りますから蓬春先生の方向分よろしくお願申上げます、昨日品川無子君が見へましたからカクレイシヤを頼むで置きました(見本に小下図用のもの)、今日は又エライ暑さですね、御返事が後れて済みませんでした、皆々様へよろしく御伝へ願います

頓首

6 昭和六年十一月二十三日

田岡春径 封書 ②

157

其後ほとんど御無音に打過失礼いたしました、初冬の風が寒くなってまいりましたが皆々様お変わりありませんか、私共も出発以来一ヶ月になります佐渡もいよく炬燵の生活に入りました

昼間は仕事で致方もありませんがせめて夜だけは手紙位は書きたいと存じて居りましたが誰かしら来客がありまして殆每晚十一時十二時迄おつき合をするので全くがっかりします、そんなわけで一向外へも出られず折角の佐渡情緒も味ふ事も出来ず随て余談も生れずつかうかくと御無沙汰になりました申訳ありませんでした、一週間程前に両津から河原田へ引移りました、両津は新潟通ひの汽船発着の港でして毎日二回づゝ汽笛を聞きますのが島に居るある淋しみを感じました、今日は島には珍しい小春日和でしたから署長に案内されて真野御陵(此所は順徳帝の御陵墓です)と阿仏房(日蓮上人由緒の寺)を参拝し夫れから芸者の産地小木の港(これは尾崎紅葉が長く滞在して土地の芸者とのロマンスにて有名な所)を見物して来ました(監視附ですから産物は拝見もせず帰りましたので其の情緒を茲に物語する事が出来ませ

んのを遺憾に思ひます)、写生の箇所もありましたが同行者があるので更めて出掛る積りです、真野御陵参拝に依て順徳帝の御いたわしさを実に畏れ多き事と思はれました、御陵へ上る道すがらに「挿絵Ⅱ立て札」がありまして夫れに御製が記されてあります

順徳上皇の御製

おもひきや雲の上をばよそに見て 真野の入江に朽ちはてんとは
あまり畏れ多いので涙が出ます

〔挿絵〕この図は日野中納言資朝公の墓で極めて貧弱なものです。五六百年間其のまゝの幽しいものです

〔挿絵〕これは佐渡のたこ取りです

佐渡は来月上旬引揚げの積りです、又次便でお便りいたします、それではこれで失礼いたします

奥様によるしくお伝へ下さい、愚妻よりもよろしく申し上げます

十一月廿三日夜

春生

7 昭和七年一月十五日 田岡春径 封書

177

御懇書難有御礼申し上げます

先日折角の御光来に依てお構ひ不申上失礼いたしました

あの日は貴兄の御来遊にて小生は帰宅以来はじめて山荘の春気分になりついでに浮れ出しました、何はなくともあゝした内輪同士の歓談は実に気持の好みものです、お帰りは大へんお寒かつたさうでいつそお泊りを願つた方が良かったと存じました

御作印は短日月にあれ丈けの出来栄へは実に敬服しました、何卒小生にも一

願小印御執刀お願いいたします、あれから東京へ参り帰宅後の翌日清名幸谷へ衝立を描きに出掛けましたので御返事延引失礼いたしました、選挙も間近に相成時下御多忙御苦勞に存じます、折角御自重を祈ります、それでは又お目に懸りました節ゆるく

皆々様へよろしく御伝へ願います

乱筆多謝

一月十五日

田岡春径

8 昭和七年二月二十七日 田岡春径 封書

E 13

拝啓、先日の法要にてお寒いところを何やかや御面倒を見て頂き恐縮でした、例に依て吞気や揃ひ、嘸々お肝の煎れた事と存じます、然てお庇様で三周忌も無事に済みました故先生も満足でせう

先日は度々御見舞下さいまして有難ふ存じます、私も今日は一先づ床を離れて少し日光浴もして見ましたが誠に気分がよろしう御座いました、もう一両日で全快と存じますから御安心下さい、家内も別段障りもありませんでした、一昨夕のお帰りは寒くて歩きにくい雪の道やらそしてお荷物やらでほんとうに御困難な事でした。せう、なんだかんだといつも貴下のお骨折を願ひ御迷惑のほど重々お察し申し上げます、マア其内一日のんびりと遊びませう
先は御礼まで、皆々様へよろしく御伝願ます

二月廿七日

田岡春径

9 昭和七年三月九日 田岡春径 封書

G 40

拝啓、一昨日はわさくお便にておめづらしいお餅を沢山頂戴御馳走様でした、先日は御酒を過ぎされ御気分がお悪いさうですがもうお直りになりました

たか、それからお酒を禁じられた由まさか血圧が高いわけでもないのではやうネ、まあ折角御自重を祈ります

橘様のお祭りにお招き下さいまして有難ふ存じます、本日お邪魔いたしたいと存じました処、風があまり強いのでまだ二人とも本当でありませんし誠に乍残念失礼させて頂きました、どうかあしからず思召願います、今朝おはがきにて兼々お願いいたしてありました画印大へん上等に出来まして大キサも丁度結構です、是非頂かせて下さい

そろく陽気も良くなつて参りました、何となく写生慾にかられます
先は御礼迄、いづれお目にかゝりましてゆるく

三月九日

田岡春径生

頓首

10 昭和七年三月十五日

田岡春径 封書

E 14

拝啓、本日はお目にかゝれず残念でした、御丹青の画印白朱二顆御遠慮なく頂戴して参りました、今日持参の色紙に捺してみましたら誠にうつりが良しく頗上等です、奥様のお話では大分御熱心だそうでお楽しみほほど甚羨やましい事です

今日御手許へ差出しました画会の内容書の通り月掛法で計画しましたが、時節柄お骨が折れご迷惑でせうが又御後援をお願いしたいと存じます、委しい事は何れ御拝眉の上御相談お願申上げます、大綱の方も知人にお願いたしました、石井、矢部両君にも是非御援助をお頼みする積ですが今日はお寄りせずに戻りました

先は御礼旁々御願まで宜敷お願申上げます

三月十五日

春径生

頓首

11 昭和十年四月二十一日 田岡春径 封書

I 86

先夜は失礼いたしました、お蔭様で大へん愉快でしたが之も猫の先生の談は全く意外の尤物で面白かつたです、是非彼のロマンスをゆるく聞ませう、帰りには態々お送り下さいまして恐縮でした、お帰りが大へんでしたでせう、南画院出品も一両日中に完成します、何しろ構図が六ヶしいので満足なのは出来ませんがマア出してみませう、今月一杯は一寸忙しいですから来月お伺いたします、半切会の方分よろしく御配慮願いたします、先日青々会を一寸覗きました、サスガなかく結構なもの斗りでした、会場で深水、希望両先生に会ひました、蓬春先生は其時まだ見なかつたのでお会ひしませんでした、委細は御拝眉之時申上げます、出品画執筆中甚乱筆で失礼いたします御家中皆々様へよろしく御伝願歟

四月二十一日

春径生

12 昭和十年十月六日 田岡春径 葉書

D 19

拝啓、天候も相定まりいよく高秋之季と相成、大に山谷の探索にそゝられ候、先達院展へ参り速水御舟氏の遺作を拝見、サスガニうまかつたと敬服いたし候、来春の帝展も矢張今年中に大体を作成致さねばならず、目下画題に悩まされ居候、例之画会の方、何卒精々御勧誘御尽力之程、只管御願申上候何れ御拝眉方々

13 昭和十年十月二十三日 田岡春径 封書

C 2

拝啓、秋冷之候益々御勇健程賀申上候、偕早速御丁寧なる御祝詞戴き恐縮に存候、昨年来兎角不健康にて本年も病中之製作、甚お恥かしき未成品に御

座候、然る処如何なる廻り合せか今年は特選候補(十二名)中に挙げられ候処
第五位にて次点と相成申候、向後大に研究を重ねる積に御座候

先日会場一覽仕候処、南画之出来ばへ甚寥々たるものを感じ候、畢竟南画は
会場芸術で無い事を思はせられ候、結構大会場にて戦ふにはモツトく強い
ものが無くてはといふ事に相成可申候
何れ拝姿之節万々、右御礼御挨拶迄申上候

十月廿三日

田岡春径

敬具

14 昭和口年三月二十四日

田岡春径

封書

E 1

いつまでもお寒い事ですがお障りもなく不相変刀に親しむで居られる事と存
じます

昨日石井様が白閑亭へ見へましたのでお目にかゝりました、そして画会の事
も一寸お話いたしましたら屏風の方を心配して下さるさうです、大綱有志の
申出で、時節柄出来るだけ額を低減して所謂民衆的にして数を拵へた方がよ
ろしいと云ふので規定を変更(別紙)しましたから宜敷お願いいたします

同封の本は白閑亭へ来たのですが御熟読の上御注文になられては如何ですか、
呵々、白頭は幾らなど、いふ事でなくかまわずお持ちになつたらよろしいで
せう

それでは又申し上げます

三月廿四日

春径生

15 昭和口年四月七日

田岡春径

封書

I 44

拝復、今回は又何かと御配慮御迷惑御願申上恐縮です、お庇様で兎に角茂野

さんや奥さんも一安心出来たわけです、いつもながら白閑亭では実際あなた
の御同情とお世話を頂いて居るのでどれだけ助かつて居る事だ知れませんが、
大に感謝しなければならぬわけですよ

後援会は誠に結構です、只今大綱町の方を頼んで歩いて居りますから二三日
中に仁茂田さんへお送りし仁茂田さんから石井さんそしてお宅へ届く事にな
ります、白閑亭は別条有りませんから御安心下さい
それでは是れで失礼いたします、画会の方精々お願申上ます

四月七日

春径生

16 昭和口年三月二十日

田岡春径

封書

I 46

先夜は春宵秘話に興がり誠に失礼いたしました、人生は硬軟相俟つて大に意
義あるものと存じます、編鞆は実は私にもよくわかりませんので白閑亭奥さ
んにそれとなく聞いてみましたが、具体的の事を申されませんけれど先日
一寸申上げました通り五十円で買ったものさうですすから其の半分見当でど
んなものでせうか、籠は添へて差上げるさうです、又代金は何時でもよろし
いでせう(先日逃がした時捕まへた人に五円札をしたさうです)、然し外なら
ぬ貴君の事ですからマア幾らでも御氣持の礼でよろしかないでせうか、兎に
角改まつて御心配もいらぬでせう

三里塚の桜は全国的に有名の事、昨夜或る書物で見まして憶れて居ります、
今年是非お供いたしたいものですね、近日又面白いお話を伺ふ事を楽しみ
にして居ります、画会の方、何卒よろしくお願ひ致します

奥様へくれぐれもよろしくお伝へ願ひます

三月廿日

春径生

●秋野不矩

1 昭和六年一月十八日 秋野不矩 封書 図③

D 30

御手紙うれしう拝見致しました、御ねんごろな御言葉頂きました。感謝いたして居ります、どうぞ御心に沿ふやうなものが出来ればよろしいとそれのみねがつて居りますがほんたうに思ふ程にゆきません、特選なぞ思ひもありません、入選にビク／＼してゐる程度です、でも帝展が最高のものでもなければ、また私も研究の道程として落選するならば仕方がないのだと都合のいゝ事を思つてゐますが、ねがふならいろいろの点から入選してほしいとねがひます

図柄は

「挿絵」野良犬が夏の炎天下を歩いてゐる気持を画きたいと思つてゐるのでございます、今土のおくりをどうしやうと迷つてゐます、私には少し無理のやうに思へて来ました、困りました、どうぞ皆さまへは内緒に遊して下さいませ、落ちたら愧しうございますから、御やさしい御言葉にあまへて申し上げます

先日からまた下図に戻つてゐるのでございます

御暑い折から御体こそ御大切に遊して下さいませ

かしこ

ふく

2 「昭和六年」五月二十一日 秋野不矩 封書

B 22

御便り有難う存じました、石井先生遺作展につきさぞかし御体もおつかれの御事、私なぞの思ひも及びません、さまざまの御心労もございました御事と存じたゞ／＼謝し申し上げます、またつたない私なぞの事日頃御心にかけ下さ

いましてほんたうにうれしく存じます、今度の塾展の絵は失敗でございました

宮谷に居りました頃あの町まで十町の途上、彼岸花の咲く土手に黄牛の居たのを忘れられずいつか図にしたいと思つてゐました、そんな因からも少し強く黒牛と赤い花といふ対照を思ひ切り表現して見やうと思つたのですが、何分手も頭もきかずなまぬるものになりまして題も従つて初めとは変り朝露になつてしまひました、も一度初めの思ひ通りに表現して見たく思つてゐます、あまりいい出来でもありませんが国際美術展へ出品する事にしました
また帝展の準備でございます、たゞ／＼勉強のみです、今後何卒御力になつて頂きたく存じます、絵ハガキは色がないので感じが全く違ひます
御体御大切に遊しませ

先生の画帖私へも御わけ願へませうか

五月二十一日

ふく

3 昭和六年十月七日 秋野不矩 封書

D 26

御無沙汰いたしました、その後御健やかにいらされますか、御伺ひ申し上げます

あはたゞしい二ヶ月が過ぎました、製作中は度々御ねんごろな御手紙を頂きまして忝うその節々感謝致して居りました、御手紙差上げたう存じながら製作は失敗に失敗を重ね何とも申上げやうもない次第、去る二十八日迄土坡のみ塗りつぶして思ふ処にゆかず、はや期日が迫るものですから二十九日より改めて描法を一変しやつと仕上げを間に合せました、もう夜も昼もなく夢とも現とももう考へるといふ事など到底出来ません、我ながら愚しう思ひます

けれど全くフラク／＼になつてしまひました、そんな次第ではとてもよい作品の生れるはずもなく出品は致しましたけれど思ひ返す処はありません、今度はあきらめました、御期待下さる方にたゞ何か申訳無とひそかに泣いてゐます、御許し遊しませ

でも非常に勉強になりました、去年よりもづゝと得る処がありました、絵の道の何が本格的な進み方であるか、自分の現在してゐる立場などまことに明らかになり、もつと勉強しなければならぬ、もつと自然の前にケイケンでなければならぬ、自分は愚かであつたと痛切に思ひます、今度は自分の悟る処の多かつた事を唯一の収穫としてあきらめます、どうぞ石渡様もさう思召し下さいませ、来年こそはもつと遺憾ない仕事をしなければならぬと思つてゐます、どうぞ石井先生の御奥さまへもよろしく申上げて下さいませ、ほんたうに面目次第もない事でございます

写生によい時候となりました、たゞひたすらに勉強致します、御体こそ御大切に遊しませ、落選いたしましたもどうぞ御見落に遊ばさないで下さいませ、御ねがひ申し上げます

十月七日

かしこ

ふく

4 昭和七年一月二十九日 秋野不矩 封書

D 37

梅の満開、菜の花ももう咲き出すとは御羨しう存じます、京都は昨日あたりから何だか冷え気味にてしぐれなど催して居ります

昨日は小包今朝は御端書頂戴いたしました、あのやうなものの、御礼など、伺ひますとたゞもう恐れ入つて居ります、わざわざ東京までもおいで遊して私のために御選び下さいました御品、勿体ないやうな気持が致します、ほんた

うに今年こそは確り勉強して前のやうにでなしにあの色紙に堂々筆が下せるやうになりたいと思ひます、ほんたうに有難う存じます、折角の御心のこもつた御品、うれしく頂戴いたします

今二月の研究会へ出す作品を描いて居ります、平凡な材で、猫と子供を描いてゐます、いつもデッサンが不正確で先生はじめ皆さまから御注意を受けて居ります、何しろわたしの性質は気儘と見えてしまつて絵がいつも仕上がつた事がありません、もつとく／＼心を入れかへる必要があります、五月の九日頃塾展ですのでこれの下図もボツ／＼作り始めなければなりません

御体を御いとひ遊しますやう、また御便り申上ます
先づはとりあへず御礼申上ます

かしこ

不矩

冬の日の曇の落ち陽うすれたり、しみ入る如きはかなさを置きて都会の隅に居れば陽さへ充分に浴びた事ありません

5 昭和八年二月七日 秋野不矩 封書

G 9

御久々の御便り御なつかしう拝見いたしました、御障りもなく御在します由、何よりもうれしう存じ上げます

六潮会の山口先生の御作絵ハガキ有難う存じました、東京もぼつ／＼春の展覧会の季節に入ります事と存じます、私共の方も塾展が四月中旬に開かれますのでその準備をしなければなりません、また今度新しく奈那久佐会といふ会が出来まして大阪京都で七人の女流作家が出品するやうに決りました、生田花朝さん梶原緋佐子さん三谷さんなどの方で私もその中へ入れて頂きました、三月の中旬に第一回の展覧会が開かれる事になりましたので、この頃は

いろいろ忙しく御約束いたしました絵も心に任せずまことに不本意に存じ
ます、どうぞ悪しからず御思召し下さいませ、いづれ塾展でもすみしたら何
か御目にかけてたく存じて居ります

立春もすぎましたのになを雪なども降りますやら御寒い御事でございます、
御自愛の程祈り居ります、御輿様へも御よろしく御ねがひ申上ます

二月七日

かしこ

不矩

6 昭和八年八月六日 秋野不矩 封書

D 38

夏もまさかりにて凌ぎ難い昨日今日の御暑さ、殊に御地は不作にて御苦し
みの由、何と申上げてよろしいか言葉もございません、まことに昨年も御凶作
の由承りました、商人よりなにより農にたづさはる人達の労苦に報ひられな
いとふ事は思つたゞけでもたまらない気がいたします、その御当地にあつ
て、ともかく朝夕に御過し遊す御心御察し申上ます、暑さも本年はこの外
とて、御体なぞ御障りもなければと御案じ申上げて居ります

私も御蔭さまにて無事また制作の準備に忙しく過して居ります、今年は朝顔
の棚を描く事になり写生してゐます、いつも御約束のみにてすまないと存じ
居ります、本年のうちには果させて頂きます、いづれまた申上ます

御体こそは御大切に遊しますやう、なを少しでも作物の好収穫を祈ります、
皆さまに御よろしうねがひ上ます

八月六日

かしこ

不矩

7 昭和八年十月十三日 秋野不矩 封書

B 18

御祝ありがたう存じました、御健やかに何よりうれしう存じます、私は今
度の図の事申上げたやうに思つてゐましたが

朝露、平凡な絵です、御覧になつて落胆遊ばさないやう、あんなもので満足
してゐると思召さないで下さいませ、もつとやりますから、特選はまた三谷
さんでした、女ながらえらいと思ひます、また那奈久佐会(マ)が十一月にありま
すので忙しい事です

同封の巻、失礼でございますが御使用下さいませ

かしこ

十三日

不矩

8 昭和十年八月三十一日 秋野不矩 封書

D 29

雨が降る度に秋といふ感を深めて来ました、白閑亭の萩芙蓉の庭を思はずも
浮びます

先日は私共へ御丁寧な御玉章を賜りまして恐縮に存じました、扇子の海老は
試作で不出来でございましたので殊に恐縮してゐました、御言葉に甘んじ拙
筆半折を二三日前御送附いたしました、また海老ですが扇子の時より少しな
れて来ましたから、今一つも駄作で御笑ひまでに過ぎません、またもつと上
手になるつもりですから御許し下さるやうにと申してゐました

それよりも坊ちやまが御生れになりました由、御めでたう存じます、今這ひ
くが出来ますなら二三月頃御生れになりましたわけでございますか、まこ
とに御芽出度う存じます、どんなにか御楽しみみの御事か御祝し申上ます、別
送の色紙たゞ心からうれしさのあまり御印しまでに御笑納下さい
いづれ沢からも申上げます

かしこ

八月三十一日

不矩

9 昭和十年九月六日 秋野不矩 封書

D 33

虫の音がしみくときける今年の秋をうれしく思つてゐます、正に五年ぶりと存じます、帝展へ出品するやうになりましてからはほんたうにこの涼しさこの虫の音をきくにつけて出品期日の近づいた事を心もとなく思はねばなりませんでした、今年は秋の写生も充分出来ますので主人も私もよこんでゐます

石渡様、御風の月きよきの御書、ほんたうに思ひがけませんでした、狭い家の見すばらしい床にそれを二人でかけまして勿体ない気がいたしました、然しおもむろに拝誦いたしましたして何とも名采し難い心の琴線に触れたよろこび、寸時電気にも打たれた様な思ひでございました、そしてこの見苦しい床ながら御風にも石渡さまにも恥じるには及ばないと思ひ至りました、たゞこゝに湧き生じたこの感激のどんなに尊たてくて得難いかと沁々と味ひ教へられ清められました、そして人にも見せ、ともにこの歌を通じて結ばれる想ひはどんなにか深くうれしいものであらうかと楽しんでゐます、ほんたうに吾々には身に余る御賜物ではございますがほんたうにうれしく頂戴いたしました、感謝いたしてゐます、然しまた承ればこの程ようやくに御手に入れられましたとか申訳なく存じます、御厚意深く身にしめてよい絵かきになります、これは石渡さまの無言のうちに吾々に垂れてゐられる要求であり教訓であらうと存じます、想へば私の良寛を知りましたも石井先生の処でこの御風著になる処の大愚良寛を読みまして以来でございました

くだくしく長くなりまして、たゞ私からも御礼申上げたくてとりあへず

筆を走らせましたわけでございます

乱筆にて失礼御ゆるし下さいませ

かしこ

九月六日夜

不矩

10 昭和十二年二月五日 秋野不矩 封書

D 36

こちらこそ御無沙汰いたしましたして御許し下さいませ、ほんたうに本年は暖かな年でございます、こちらも春の様な陽ざしにて梅も咲いてゐます

過日は結構な干柿を頂きまして有難う存じました、実においしい味でございますね、色もほんたうに美しうございまして絵にもしたい様です、早速に御礼さし出す筈の処、明日から一寸した展覽会が開かれますのでそれに二人とも出品いたす事になつて居まして、只今ようやく描けました様なわけで失礼いたしました、御礼状は斯様に遅れましたにかゝらず頂きました事は早速に賞味いたしました様な次第で御恥しい事です、御寛容下さいませ

主人は檉・藤の芽ばへ時にひたきのとまつてゐる花鳥図、私は黒猫に茶山花の散つてゐる地面です、あまりよい出来にはゆきませんでしたでしたが近かつたならば御高評も頂けるものをとらまれます

宮谷に次郎柿が赤く実るとか、あの柿の苗と同時に植えました故郷の家の次郎柿も年毎に多量の実をつけますから、宮谷のもさもあらんと想像がつきます、何だか涙ぐましい様な詩情が湧きます、先生の御膝下に私ならで遠州の次郎柿が可愛がられてゐるのかといふ気がいたします、柿の枝にたまさかに飛んで来てなく頬白の様に、私もたまには一度是非御墓参に参上いたし度いと存じます、御てい様は最近京都下鴨の方のさる良家に御手伝ひにゆかれまして、御良縁を心がけてゐる次第ですがなかくに無力でして御恥しい次第

です

毎日御忙しい御様子、御無理など遊して御障りのない様ひたすらに御祈りいたします、未筆ながら御奥様にも御よろしう御つたへ下さいませ

二月五日

宏毅 不矩

かしこ

11 昭和十三年三月三十日

秋野不矩 封書

D 28

御無沙汰申しましてすみません、その後は御機嫌よろしう御在しますでせうか御伺ひ申上ます

いつかは御丁寧なる御手紙を主人へ頂きまして有難う存じました、三月には私が是非何か写生いたしましたして御笑ひに供したく心がけておりました処さる二十三日から熟展出品制作に着手が遅れました、その上身体が少し悪く熱が出たりしまして出品がようやく出来た位でした、昨日から起き出しました、もう大丈夫です、三月ももう今日で終ります、早速に何か写生し度いと思つてゐます、この暖い三月中花の咲かない梅を御眺め下さいまして御気の毒でございました、主人とも御噂さ申上げてゐました

□月三十日

かしこ 不矩

12 「昭和十三年九」十月二十日

秋野不矩 封書

G 2

菊の花も咲き初めまして秋もいよく深くなりました

先日は早速に御丁寧なる御祝詞を賜りましていつもながら御厚情有難う存じ

ます、なをまた御丁寧に御祝ひを頂きましてまことに恐縮いたしました、私もほんたうにうれしく存じました、いつもく吾が事に御心配下さいまして今年には心から御よろこび下さいます事が出来、神様に感謝する様な気持ちでございます

山口先生の御話有難う存じました、これは中村大三郎先生の話、審査員十三人出席の処、十二標点数が入つて居りました由承りまして、主人も私も全くうれしく存じました、然しうれしい等と申上げるのは全く石渡様だから申上げます処で、全く勉強はいよくこれからといふ境に入つたわけでございます、うれしい等とよろこんでゐる時ではございません、特選を得て私共の有難いと思ふことは、今後、気持の上に落ちついて勉強の出来さうな事でございます、自分の仕事を続けてゆく生涯をかけて一歩々々、天才でも何でもない私共は一にも二にも勉強でございます

何卒この後もよろしく御鞭撻下さいませ、御ねがひいたします、またいつか御上洛遊しました頃の様なもみちの秋に近づきました、また御出かけ下さいませ、御待ちいたしてゐます

十月二十日

不矩

13 昭和十四年四月二十九日

秋野不矩 封書

G 6

花も散つて若葉のすがしいこの頃となりました、一昨日の御葉書（蓬春先生の御絵の）拜見いたしました、北海道へ御妹様御なくなり遊しました御由とんだ御事にございました、さぞかしまだ御若くて御在しました御事でございませうものを、つゝしんで御悔み申上げます、連山にまだ白雪のた々ける北海道の春浅い大気の中に御淋しくしみく御在します御姿を想ひうかべて

ゐます、御心落し遊さぬ様に祈ります

先日から、御約束を忘れた事はありませんが、塾展につゞく市展で失礼を重
てみました、御ゆるし下さいませ

もう御帰宅遊しましたでせうか、また今度何時でもよろしうございますから
御上洛遊して下さいませ、京都もいゝ処です、御待ち申上げます、いづれま
た申上げます

主人からもよろしく申出でゝゐます

四月二十九日

ふく

14 昭和十四年九月十八日

秋野不矩 封書

G 10

漸くに朝夕は御涼しうなりました、御機嫌よろしう御在します御様子何より
もうれしう存じます、いつかは御丁寧な御玉章拝誦いたしまして有難う存じ
ました、また再度御便り頂きまして御芳情忝う存じます、七月から制作準備
の為め伊勢湾の嶋へ写生旅行いたしました処、子供連れで参り暫くゆつくり
写生する心組でゆきましたのですが、土地に不なれの為め、食餌、氣候の変
化の為め三人共子供らが次々病氣いたしましたして熱等出しますので写生も出来
ず帰洛いたしましたして、八月中九月に入つてからも今もつて子供らが弱つてゐ
ます、然しもう大体恢復いたしました、そんなわけでその間に新しくまた材
料を求めて制作の方も進めねばならぬしことに閉口いたしました、御返事
もつい失礼いたしましたして深く御詫び申上げます、主人は海女を私は朝顔に女
をかきます、制作も後半月ほどになりまして一生懸命です

いづれまた制作を終へましてから申上げ度いと存じます、とりあへず御詫び
申上げます、御自愛を祈ります

かしこ

九月十八日

不矩

15 昭和十四年九月二十三日

秋野不矩 封書

G 8

明日は彼岸の中日です、御ねんごろな御玉章くり返し拝誦いたし御厚情深く
感謝いたします、御心づくし拝受いたしました、御蔭様で子供も大分よろし
うございます、御期待に沿ひ度くひたすら精進いたします、いづれ制作がす
みましてから御礼申上げ度いと存じます、御自愛を祈ります、御話の黒川さ
んは存じてゐます、ではまたいづれ

九月二十三日

不矩

16 昭和十四年十月五日

秋野不矩 封書

G 7

秋の日にざくろももう破れさうに実りました、御機嫌よろしう御過し遊され
ますか
制作中は御心配下さいましてほんたうにうれしう存じました、御期待に沿ひ
度く最後の日までがんばりましたが今日は面目もございません、朝顔の葉は
どうく、意の如くになりませんでした、初めから緑青でしたすればよかつた
のですが少し計劃した色がどうしてもよい色に出ないので、緑青の色の冴
へたのはいく度も重ねなければ出ないので、もうすでに日が足りません、人
物ですと早仕上げでも出来ない事はありますが花鳥は駄目です、来年とい
ふと遠いと実に思ひますが三四月頃の塾展まで、ほんたうに恥しい事と思ひ
ます、捲土重来を誓ひます、御ゆるしをねがひます、主人は海女出品いたし
ました

いづれ後便で申上げます、とりあへず

かしこ

十月五日

不矩

17 昭和十四年十二月十七日 秋野不矩 封書

G 1・②

御寒くなりました、御障りございません事と存じます

先日は御手紙有難う存じました、写真につきまして早速御送り申上げるつもり
の処、一枚夕日楓の処をこちらで引延し、てみました（御送りしやうと
存じまして）のでそれが出来ましてから一緒に御送りいたさうと存じていま
した、直ぐに出来て来まして早速御送りいたさうと話してみましたのに、こ
の四五日同情週間だの、その他つい忙しさにとりまぎれて申訳ございませ
ん本日原板と一緒に同封いたしました、主人の下手な撮影でも、その様に御所
望下さいましたら本望でございます

またすぐに御正月が来ます、御多忙な一年でございましたから御自愛を祈
ります

かしこ

十二月十七日

不矩

18 昭和十五年十一月二十二日 秋野不矩 封書

E 26

秋も深くなりまして朝夕は寒さを覚える程になりました

先日は御なつかしい御手紙有難う存じました、ようやく制作を終へて、でも
不十分な仕事の後口の悪さに苦い想ひをしてゐます、いつも来年は来年はで
は何にもならない繰り事でございますが御笑ひ下さい、今年も失敗のまゝで、
さう毎年休んでは恥しいし奉祝にも反すると存じまして恥をさらした事です
博物館の展観、見たいと思ひますが子供がまだ小さすぎますのでまた私は奈
良で見やうと存じます、主人は今日樋口富磨さん、西山英雄さん三人で東上

しましたが今度は東京には泊らないで箱根へ寄る様に申してゐました、御厚
情うれしく存じますが今度は友人と一緒に、石渡様の方へは伺はないから
悪しからず申上げてくれと言ひ置いて立ちました、御了解下さいませ、来年
はもう私も出られますから、私がゆきます時は是非御伺ひします、来年はゆ
けさうに思ひます、ほんたうに、そして石井先生の御墓にも御伺ひし度いと
思います

その後、御事業の方は御成果いかゞでございますか、ひそかに祈つてゐます、
皆様によろしく御伝へねがひます、乱筆にて失礼御ゆるし下さいませ、御自
愛を祈ります

かしこ

十一月二十二日

不矩

19 昭和十六年四月二日 秋野不矩 封書

E 25

桜の咲く頃になりました、過日は御なつかしい御手紙有難う存じました、い
つも御無沙汰申上げておそれにもかゝらず御やさしい御心づくしを深く
く感謝いたしてゐます

先生の御命日には御一人で御墓参下さいまして有難う存じます、私もいつか
石渡様と御一緒に御墓参がいたし度いと久しく念願いたしてゐます

私共は何やかやと日を暮らして、また本年も春の塾展の頃になりました、
本年は塾の創立の二十週年に当りますので海軍の軍艦に献納いたす額を描く
事に決りまして、時局柄職域奉公といふわけでございます、軍艦の艦名に因
む絵をかく事になりました、主人は霧島と室戸です、私は天竜で故郷をかき
ます、主人も私も近日写生にゆきます、主人の方は九州と四国ですからなか
く遠くでございます

二尺横物位の大きさですから小さいですが充実したまことのこもつた絵をか
くつもりです、風景ははじめてですがそれだけ面白いと思つてゐます、五月
にその展覧会が京都と大阪で催されます

それから、昨年の末、東京の山口先生やこちらの福田平八郎先生徳岡先生方
の御推撰で蒼口賞といふ賞を頂きました、山口先生に御目にかゝる節もござ
いましたら御礼申上げて下さいませ

御自愛遊して下さいませ、御約束を果さないのでもことに恥しく存じます、
でもその方がいゝかも知れませんが、もつとよくなり度いと思つてゐます、い
づれまた申し上げます

四月二日

ふく

20 「昭和十六年」五月二十七日 秋野不矩 封書

B 15

昨日の雨に東山もすつかり夏の粧ひになりました

先日は御なつかしい御手紙有難う存じました、ほんたうに一年早く経つもの
でございます、石和田様秋場様御機嫌よろしう御在しますでせうか、よろし
うお伝へねがひ上げます

去る十六日から十八日迄二十周年記念の塾展で軍艦へ献納画の展覧会がござ
いました、献納する軍艦の名にちなむ画題でかきました、主人は室戸と霧嶋
私は巡洋艦天竜へかきました、久々に帰省しまして天竜を写生して来ました、
この展覧会は来月の十一日から十六日迄、今度は海軍省の主催展としまして
東京高嶋屋で開きます、若し東京へ御出になるついででもございましたら御
覧下さいませ、二三日前にその画集御送りいたしました

いづれまた申し上げます、御返事が遅れまして失礼いたしました、只今大阪で

開催中で何かととりまぎれ申訳ございません
御体を御大切に遊して下さいませ

かしこ

五月二十七日

不矩

21 「昭和十七年九」三月二十七日 秋野不矩 封書

D 31

春らしく御暖かになりました、もう桜が今日咲き初めました、戦勝の春とは
申しながら何もかも朗らかな春でございます

昨日は御やさしい御手紙を頂きまして慈父に叱られてゐる様な快さを覚えま
した、いつも御心にかけて頂きましてうれしく有難う存じます

この頃筆もさへませんで恥しい絵をかきまして恐縮してゐます、もつと心し
なければいけません、五月からまた京都市展がありますので来月一ぱいその
制作でございます、この頃風邪引きで少し閉口しましたがもう大丈夫です、
石渡様にはいつも御健やかに御在します御様子まことにうれしく存じます
主人も元気にして勉強してゐます、よろしくと申してゐます、またいづれ申
上げます、御自愛を祈ります

かしこ

三月二十七日

不矩

22 昭和十七年九月二十五日 秋野不矩 封書

D 35

昨夜は名月でございましたが今夜は昨夜よりももつと大きな月の様な感じが
いたします、よい月夜です、随分御涼しうなりまして、出品も間近く心せは
しい気がします

御なつかしい御手紙有難く拝誦いたしました、私共の御無沙汰のいたし様と
申しましたらもう義理の悪いのを通りこしてゐまして申上げ様もない次第で

ございます、御詫びいたします、御風の月きよきの歌もこんな日の砂浜であつたかとなつかしい気がしてゐます

制作はなかく、捗りませんが二人とも一生けん命です、主人は大学の考古学教室を描いてゐます、私は極く平凡ですが温室と人物をやつてゐます、平凡な図ですから難しいです、あまくなりさうです、困ります

栖鳳先生が御なくなりなされて京都は寂しい事です

御自愛專一に祈ります

いつも御忘れ下さらず御芳情を深く感謝してゐます、石井与作様御なくなり遊されました御由、御いたみ申してゐます

いづれまた制作の後に申し上げます

とりいそぎ御礼申し上げます

九月二十五日

かしこ

不矩

23 昭和十八年五月十四日

秋野不矩 封書

E 23

若葉の美しいこの頃となりました、その後は御障りなく御在します御様子何よりも御祝し申し上げます

先日はまた結構なる干魚御恵送頂きましてまことに有難う存じました、相かはらず物不足の処まことに御厚情忝う存じます、あまり勝手な御ねがひをいたしまして申訳なく存じてゐる次第でございます、殊に石渡様には何かと御多用の処拝察いたし居りますのでまことに御迷惑な事でございますと、この頃になつてまことに申訳なく恐縮に存じてゐます、御容寛下さいませ、京都の市展もこの廿日ですみますが、私は童女の立像を描きました、これからまた秋の制作準備にかゝるのでございます、いっぞやの産業戦士贈画展は今、

東京中島飛行機製作所で開催中でございますが東京では公開しないさうでございます、先日、主人は日立銅山へ行つて来ましたが非常に工員諸士によるこばれたさうでございます

御身御大切に祈ります、そのうちまた申し上げます

とり急ぎ御礼申し上げます、今日の研究会作品を描く為め御返事延引いたし申訳ございません、主人からもよろしく申出でゝゐます

五月十四日

不矩

24 昭和十八年六月二十五日

秋野不矩 封書

D 32

急に夏らしうなつて了りました、私には夏は遠く千葉の思ひ出を誘います、夏といふ季節は暑い中にまた涼しい時は更にながくしい想ひです、特に千葉で味ひました夏の風物はまことに千葉にふさはしい想ひ出です、夏は私は好なでございます、石渡様の後から白いうちはで御あふぎ申上げて、もうよくくと仰せられて御遠慮遊して御在しました、当時の夏の座敷の様など、すでに再び見る事の出来ない家をなつかしく惜しまれてなりません

度々得難い干魚を頂きまして御手数かけ御礼申上げ度いとこの間から思ひつゞけてゐました処また、先に御手紙を頂きまして面目次第もございません、平に御許し下さいませ、何か御目にかけて度いと存じてゐます、本月は度々手不足の事が起りましてつい仕事の方もはかどらず失礼を御許し下さいませ、主人からもよろしくと申出でゝゐます

六月二十五日

不矩

25 「昭和十九年頃」三月十四日 秋野不矩 封書 G3

寒い京都にも今日は珍しい小春の日和でございます、先日来ごねんごろな御手紙を賜りまして、またこの頃とても入手の難しい御品御恵頂きましてほんたうに御芳情恐縮の至りでございます、御苦心の結晶と日々食膳に押しつゝ頂戴いたしてゐます、まことに美味しい昔ながらの味を一同楽しみよることです、ほんたうに昨年からつい勝手な申上げをいたしまして御煩はしいたし申訳ございません、どうぞもう御心配下さいませに御ねがひいたします、こんな時局勿体なさ過ぎますから

去る二十九日から九州の方へ今度の産業人慰問展の写生に出かけまして十日に帰洛いたしました、十日は塾の西山英雄さんの応召の壮行会でございます、その為め九州も長く居れませんでしたが、いよく戦局も重大となりまして、私共ももう直接に勤労挺身すべき機が来てゐると存じます、日本の文化の為に日本画は保持昂揚すべき事は自覚してゐますが

これからこの月中に九州地方の会場へ出す作品と中部名古屋方面の会場へ展示するものと二点かきます、九州は島原の九十九島の風景をやるつもりです、いづれまた御礼申上げるつもりですが、とりいそぎ乱筆で失礼とは存じますが書面にて申上げます、主人からもよろしくと申してゐます

三月十四日

不矩

26 「昭和十九年」七月六日 秋野不矩 封書 D39

梅雨も晴れまして今日は全く夏らしい暑い陽が照りつけてゐます

先日は御手紙有難う存じました、五月の末から六月にかけて塾の会場巡廻展の為め静岡地方へ出張いたし居り、帰洛早々京都市展、本年は平安神宮鎮座

五十年奉祝展にてその出品に六月一ぱい、久しぶりに徹夜までしてしまいました、そんなわけで御玉章拝誦いたしましたして早速に御祝詞も申上げ度く存じながらつい失礼を重ね申訳ありません

御令息様、今春御帰還の御事、存じませんで失礼いたしました、もうそんなに御立派な御令息様がいらつしやるとは存じませんでした、ほんたうに御芽出度う存じます、これは、静岡へゆく前に描きかけましたのはやめて、新しく御祝ひの筆、御目にかける様主人とも話し合ひました、ほんたうに御芽出度く存じます

いづれ後便で申上げます

かしこ

七月六日

不矩

27 昭和二十年一月二日 秋野不矩 封書

I 98

よきしてゐました

正月の空襲も元旦も二日も無事にて、静かな新春を京都は迎へました、これも第一線の涙の出る様な御苦労の御蔭と心の底から感謝してゐます、石渡様には御つゝ、がなく御迎春の御事とはるかに御祝し申上げてゐます

昨冬御丁寧な御玉章を拝誦いたしましたして、早速に御返事申上げるべきを実は私共やむを得ぬ家主の都合にて年末を控へて転宅いたし、主人も舞鶴工廠に徴用中の事にて困難の中を移転いたしました為め少し体をこわしまして三十一日まで瘥て了ひまして、ついで、御無沙汰を重ね申訳ありません、新春早々元氣になりました起きました、幸ひ主人も十二月二十日附にて正式解除（海軍の理解にて）になり一家ようやく落着きました次第でございます、重なる失礼御許し下さいませ、乏しい中にも無事迎年いたしましたゞ有難く御

代の栄えを寿いでゐます、関東は毎日の様に空襲にて銀座の石井先生御宅も世田ヶ谷の方に御移の様承りました、左右平様も土浦の航空隊に御入隊にて全く国を挙げて危急の状でございます、戦時特別展は御覧下さいましたか、主人（徴用中制作に帰してもらひました）も私も出品いたしましたがつい東上はいたしませんでした、本年こそ戦勝の年にいたし度いもの私共も何か御役に立ち度いと精進いたしてゐます、主人も海軍より彩管を持つて御奉公してくれよとの事にて一生けん命です

転宅いたしましたのは前の家より遠くはありません、美術館の近くでございます、今度御上洛の節を御待ちしてゐます

主人よりもよろしくと申してゐます、御自愛を祈つてゐます かしこ

一月二日

不矩

28 昭和二十一年一月十五日 秋野不矩 封書

B 20

謹んで新春を御よろこび申し上げます、昨年来御無沙汰申上げましてまことにく／＼申訳なく存じ居ります、御許し下さいませ

私制作と家事に追はれまして配給以外に外出も出来ず赤ん坊はいつも背中に居ります様なわけで御返事申上げるよすがなくて居りました、春になりまして先日人の招待にて初めて四条へ出ましたが、前々からあらゆる人に肩かけの事をたづね居りましたがまことに仕様のない様な品にてとても御持ちになれる様なものでなくて非常識な値段でございます、案の条（マ）四条で私の見ましたものとても気に入るものではなく値だんばかり無茶苦茶でございます、肩かけも筋のとほつたものならば高値でもよろしいが端布の様なお嫁にいらつしやる用意にはどうかと存じます、私これからも気をつけておきます

からもう少しよいもの、見つけ次第御知らせします、ありますかどうか確かに保証もいたしかねますが、何かの拍子に掘り出す事もありませうから当てになさらず御待ち下さいませ、御奥様へ悪しからず御伝へ下さいませ、一寸買ひにそこらへ出で、もそんな品は店頭に出ではりません、よい品はもありまして店先にはないのでせう

試筆でも御目にかけて度く山々思ひますが、文展がそこに控へてゐますため制作にせかれて思ふに任せません、でも何か出来ましたら御目にかけて度いと存じてゐます

要々のみ申上げまして乱筆御許し下さいませ、主人からもよろしく申してゐます かしこ

不矩

29 「昭和二十一年」二月二十三日 秋野不矩 封書

B 21

寒が過ぎましてから急に雪等降り出でましてまた冬に逆戻り御寒くなりまして、風邪などもはやりまして居りますが御地の方はいかゞ御障りもなく御在しますでせうか御伺ひ申し上げます

先日は何よりも結構な御品わざわざ、御心をこめて荷造りして送つて頂きました、いつもながら御芳情の程うれしく忝う拝受いたしました、丁度日展制作中でうれしうございましたがついその絵も完成の見込みがつかず中止いたしました、今度は折角御期待下さいましたが京都は一般に大方不出品いたしました、僅かに四十点程京都から出品いたしました様にきゝましたが無鑑査はじめ一点も出品いたしません、輸送の不便な関係もありまして東京側より数日早く出品せねばなりません、制作期日が短くて完成難しく文部省へ延期をね

がつてゐましたがつい許可されず折角の日展第一回ですが出品見合せといふ事になりました

八月八日

不矩

栄養をつけて頂きまして御心尽しも何の御返しも出来ずまことに面目次第もございませぬが、今度の開催は少し私共無理でございましたので、次の機会にはきつと御期待に沿ひ得る様勉強するつもりです

春以来小品展等も引つゞきありまして閉口いたしました、試筆でも何か御目にかける筈の処、日展に出すつもりで写生草稿に忙しくつい一月二月とあはたゞしく過して了ひまして御年始の御言葉も怠りまして御許し下さいませ、相かはらずの日々でございませぬが漸く日も永くなりかけまして花も咲き初めましたからいよく勉強せねばならぬと存じてゐます
その後御約束も果しませんがいづれそのうちに、御奥様へよろしう御伝へねがひ上げます

二月二十三日

不矩

30昭和二十四年八月八日

秋野不矩

封書

B 16

御丁寧な御手紙拝誦いたしました、いつも御心にかけて頂きまして感謝恐縮してゐます、御つゝがなく御在します御様子何よりもうれしく存じます、私共も御蔭で無事、今は御想像の通り出品制作中でございます

台風は別に大した事はありませんでした、御安心下さいませ、春には別して御心づくしを忝ういたしまして何か御礼を申し上げ度いと存じながらつい失礼を重ねて申訳なく存じてゐます、そのうち是非何か御目にかけて度いと存じてゐます、本年はとても暑い様な気がします、絵はますます難しく
ではまた

かしこ

31昭和二十四年九月二十九日

秋野不矩

封書

B 17・①

帰りまして早速に御礼状をと思ひながらつい申訳ありません、先日は久々に御目にかゝりまして御芳情うれしく存じました、御持参の御酒は早速奥屋にて皆様にふるまいました処とても美味しくしかも利く御酒にて皆さん驚いてゐました、「これはいゝ！」と皆さん仰言つてゐられまして私もうれしく存じました、あんな場所にて一向御もてなしとて出来ませんで全く申訳ありませんでした、久々で遠くから御越し頂きましたのに申訳ありませんでした、御娘様にも相済みませんでした、悪しからず御思召下さいませ、いづれ近く何か御目にかけて度いと存じてゐます、一層勉強いたし度いと存じてゐます

かしこ

不矩

32昭和三十六年三月十日

秋野不矩

封書

I 97

御祝詞有難うございました、久しく御無沙汰申上げまして、心にかゝりながら失礼を重ね申訳ありません、御元気で御在します御様子何よりもうれしく存じます、いつもく御丁寧な御便りを頂きまして御こたへも出来ず御許し下さいませ

今度はあまり私にふさわしからぬものでむしろ愧しく思ふ次第ですが、松園賞を頂きました、これからの賞にそふべく勉強をはじめ様なわけで全く御存じの通りの者ですから、たゞ御推奨頂きました諸先生方の御期待なり御芳情に對しましては心から感謝してゐます、自分の進まうとする道がまだ一

向形ともならず序の口に在る自分ですが、その方向に対して自信がもてる様
になった事、否なりつゝある事を感じてゐます、残る私の人生を傾けて精
進するつもりです、何卒御鞭撻下さいませ

季節も漸く春が近く感ぜられる様になりました

御自愛を祈ります

三月十日

かしこ

不矩

五月の初め春季展が高嶋やで開催されます、また御高覧下さいませ様御ねが
ひいたします

33 昭和四年四月十九日

秋野不矩

封書

D 25

四月ももう半ばと過ぎますのに今年の春の寒さには呆れる程でございます、
桜も咲いた事は咲きましたが急に寒かつたり風が吹いたりしてもうつかの間
に散つて了ふ有様でございます

ご無沙汰申上げまして申訳ございません、先日は結構な丸干を沢山に御恵送
頂きましたいつもながら御芳情忝う一家一同感謝のうちに賞味申上げました、
殊に承れば兵隊さんに送る御品の一部とか、子供らは非常によろこび頂きま
した、御珍しいので毎食膳を賑はし終始有難く頂戴いたしました、厚く御礼
申上げます

仰せ迄もなく何か御目にかけて度くと前々から心にかけて居りますが今度こそ何
か御目にかけるつもりです、扇面で主人は一枚出来てゐます、近日私も扇面
でかき二枚にして御送りいたす筈でございます、御笑覧下さいませ、いつか
頂きました墨もなかく勿体なくて使ふ機もありませんが、先日主人椿の葉
に試作してゐた様でございます、大へいゝ色の様でした

東京展へは都合で私共参りません、九州展の方へゆかねばならないので、も
し御余暇もございますならば御高覧下さいませ

とり急ぎ御礼申上げます、主人からもよろしくと申し出でゝゐます

四月十九日

かしこ

不矩

34 昭和四年十二月二十九日

秋野不矩

封書

G 5

雨あがりて暖い日ざしが一時南窓に明るい午後です、御障りもなく御在しま
すか、私は相当忙しい日を今月迄過さねばなりませんでした、こんなつまら
ない家でも年の暮は忙しいのだからおかしいやらならないやらず、それで
御約束の絵もつい心が落つかず筆も染みませんでした、つまらない絵は沢山
描かせられました、それでももうこんなではとても年内といふわけにもまへ
りませんし、主人とも話しましてつまらない色紙、御なぐさみに御笑ひまで
御送附いたします

来年は五月に京都市主催の美術展がありますが、それまでには何か描けさう
に思ひますから御待ちねがひます、三谷さんにはあれから研究会にも御見え
にならず一度も御目もぢいたしません、いづれ新年には御逢ひいたします
から御旨御伝へいたすつもりです

もう二日たちますとお正月でございます、御健やかな御越年を祈ります
御奥様御嬢様にも御よろしくねがひ上ます
かしこ
主人からもよろしくと申出でゝゐます
不矩

十二月二十九日

〈Introduction to the Documents〉 Letters From Japanese Artists: Supplement to “A Bōsō Peninsula Patron and Young Japanese Painters: With a Focus on Yamaguchi Hōshun” Exhibit

Eri Yoshida, Mizuko Horiuchi

Abstract

From November 2 to December 1, 2007, the Mizuta Museum of Art, Josai International University held “A Bōsō Peninsula Patron and Young Japanese Painters: With a Focus on Yamaguchi Hōshun.” Covering the early Showa (1926-1989) to post-war periods, this exhibit presented letters and 43 works of art from the collection of the head of an old Bōsō family who supported artists with a local connection.

In addition to works by Yamaguchi Hōshun (1893-1971), there are Japanese paintings by Ishii Rinkyō (1884-1930) from Toke in Chiba prefecture; Taoka Shunkei (1887-1969), who, loving Rinkyō deeply, moved to Ōami in Chiba prefecture; Rinkyō’s apprentice, Akino Fuku (1908-2001); her husband Sawa Kōjin (1905-82); Hōshun’s apprentice Akiba Chōsei (1911-78), from Chiba; Seki Chikara (1903-200), also from Chiba; Yamada Shingo (1908-77); Yamamoto Kyūjin (1900-86); Isobe Sōkyū (1897-1967); Tsuda Seifū (1880-1978); and Naoki Tomojirō (1903-2000). There is also a vase by Katori Masahiko (1899-1988), a metal-worker with deep ties to Chiba. The majority of these works are small, hanging scrolls to be hung in an alcove, and picture albums, but they are well-suited to being the favoured gems of a private collection.

It is noteworthy that correspondence from these artists to the collector were kept by the family along with the artwork. This correspondence naturally sheds light on the relationship between the artists and the collector who supported them, as well as the artists’ feelings about their lives and works, and the friendship between the artists.

613 of the family’s letters and other documents have already been catalogued in *Chiba-ken Kingendai-shi-bukai Chōsa Hōkokusho: Bungaku/Bijutsu-kankei Shiryō Mokuroku (Chiba Prefecture Modern History Section Meeting Research Report: Literature/Art Related Documents Catalogue)*. Of these documents, 212 are letters from artists related to this exhibit. Of these 212 letters, some were reprinted in the catalogues for “A Bōsō Peninsula Patron and Young Japanese Painters: With a Focus on Yamaguchi Hōshun” and “Celebrating 120 Years Since his Birth Taoka Shunkei: A Nanga Artist in the Bōsō Region” (2007, Mizuta Museum of Art, Josai International University). The current work looks at the correspondence not published in these catalogues reprinting the full text of 72 major letters sent to the collector by four people: Yamaguchi Hōshun; Hōshun’s wife, Yamaguchi Haruko, from the same region as the collector; Taoka Shunkei; and Akino Fuku.

In addition to “Commentary” and “Artist Curriculum Vitae,” essays relating to the birth of the collection, the exhibit catalogue for “A Bōsō Peninsula Patron and Young Japanese Painters: With a Focus on Yamaguchi Hōshun,” published 22 of the exhibited works in colour illustrations. We want to reference all of them.

